

Title	ソレルと唯物史観
Sub Title	
Author	百瀬, 二郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.10 (1924. 10) ,p.1459(91)- 1478(110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜 錄

ソレルと唯物史觀

百瀬 二郎

一九二二年の初秋の頃まで、巴里はブツロオ
ニユ・スユル・セユヌに、同時に哲學者と、史家
と、經濟學者と、數學者とを一身に兼備へた一
人の思想家が佗しい庵を結んでゐた。ブウル
ジュの La Baricade の上演が彼の名のうへに僅
か光を投げかけたことはあつたが、彼は殆んど
「大向ふ」からは識られてゐない。彼の書くもの
は世衆に向くには稍や難解に過ぎるだらうか
ら、彼は死後も餘り認められることなしに終る
かも知れない。けれども却つて之は彼の望む所
で、僅か「二三ダマス」の讀者を持つことに一種

の孤獨な誇を感じてゐたのであるが、夫にも拘
らず、彼は彼の教へた道を賢くも辿つた少壯哲
學者の小さな心臓の上に著しい影響を及ぼして
ゐる。此の匿れた高名な哲人はジョルジュ・ソ
レルその人である。古い Mouvement socialiste
が、或は Pages libres, la Revue socialiste, Bull-
etin de la Société française de philosophie, Revue
de métaphysique et de morale などの或る號を開
いて見給へ、諸君は全く思ひも寄らぬ清新な思
想に觸れて、憐れ囚はれの身となるに違ひない。
それなら、その思想を盛つた表現の文體に故ら
凝つた技巧が加へられてゐるかど云ふに、そん
な點は少しも見出されないのであるが、それで
ゐて諸君を牽きつけ、諸君を感激させ、諸君を
蕪惑せずには措かない或る力を有つてゐる。而
して、その真心に迫つて來る獨創性に酔はされ
て、吾我は其時まで迷路に彷徨ふてゐたといふ

恐ろしい氣持を赫赫と諸君に起させるであらう。要するに、彼の斷定の或るものは餘りに峻烈を極めてゐるので、往往穩當でないといふ感じを與へられるが、而も尙ほ諸君は諸君の無知の跡に生長した或種の雜草を引抜かすにはゐられないであらう。

茲に於てか、吾我は初めて彼がその弟子に吹込んでゐる欽仰の念をば理解することが出来るであらう。縦しソレルが自ら私には一人の弟子もないと辯解し、また弟子を養成することは、それは出来ない相談だとさへ宣言したにしても、恐らく彼は何かの幻覺を頭に描いてゐるのである。何故かならば、若しベルグソンが書いたやうに「師匠が自分の主張する所を抽象的觀念として叙述し、敷衍し、表現する以上は、彼は既に、云はば、彼自身に對する一人の弟子である」といふことが眞であるならば、尙ほ更ら

謂ふところの弟子を有つたとして一向差支へない譯であらう。それはさうであるが、ソレルは「獨斷的情眼」から Mouvement socialiste の編輯者を目覺ました新しきヒツムである。而して此の情眼はごういふ種類のものかと云へば、理性論、民主主義の情眼であつたのである。誰でも抒情詩的情熱の發作に襲はれて、シャル・ペギイと共にいふことができる——「技術に、工業に、近世産業の近代科學に於ける關係に觸れる有ゆる問題に於て、我等が師は、實際まあ何と技術家ではないか！」と。此の言は此の先生の感化の一切の祕鑰を吾我に與へる。

蓋し今日に至るまで社會哲學と、それから特に社會主義とは、古典教育を受けた知識階級の創作であつた。彼等——大學教授、辯護士、新聞記者の徒輩——は、自ら生産に従事したことのない辭に、青樓に坐して生産をば批判した。

爲人を漫ろに想起せしめずには措かぬであらう。

ところが、ソレルは彼等と全然その行方を異にしてゐる。彼は深く生産技術を考究した後、後に後れ馳せながらイデオロジイへとやつて來た一介の職工、一個の技師である。此の特殊の能力が、彼の思想のために「新學派」の青年哲學者が發輝した熱狂の心理を説明する。更に、全く勞働と研究とに捧げられた彼の生活、而して公の名譽とは没交渉に隱者として素直に流れた彼の生涯は、此の聲名を保つ爲には詭向きであつたといふことを附加へなければならぬ。最後に、妥協を飽くまで輕蔑したこと、その博識には際涯もなかつたこと、その方法が獨創的であつたこと、それから一通り世の中を渡つて來て、もう人間には何も期待しない筈の一老思想家にしては極めて珍らしい、公憤慷慨から爆發したところの、判斷に於ける物狂はしい程の異常な激越、總て此等の豪放、不羈、學識の特質は、彼の

斯様な人物は自らを語る——それが自傳の形式であらうと、肖像の形式であらうと——ことを好まないものだ、それで彼がランツィロの問に答へた手紙も彼の生涯の極く大まかな輪廓しか語つてゐないし、又佛蘭西ですら彼の寫眞を見たものは先づないのである。けれども、一人の思想家を識る上には是非とも無くてならぬものは、その思想醸成の環境である。ダニエル・アレヴィの示教を辣つまでもなく、ランツィロに與へた書簡のうちソレル自ら語つた如く、彼はエコオル・ポリテクニクの出身である。大學は彼を決して薰陶しなかつたと均しく、彼の方でも大學とは少しも交渉がない。而して管に大學教育を受けなかつたばかりでなく、僅かでも大學的精神や、大學的方法に關係があるもの

は、一切之を唾棄し嘲笑せずんば熄まざるかの概がある。彼は「大學が撒散らす、平凡にして莫迦げきつた教化」をば最高の輕蔑を以て語つた。彼の説く所に依れば、官學が三十年このかた執り來つた方針は、悉く新規蕪直しの要がある云つてもいい位、お話にならないものである。而して彼は、予は自分の受けた教育の惡影響を掃ひ落すために二十年も勞苦したと宣言してゐる。レイディ・マクベスと雖も例の血の汚染を洗ひ落すことには以上熱中はしなかつたらう。

そこで、母鬘が香を焚いてゐる輪光の頭上には、情容赦もない鐵鎚を期待しなくてはならぬ。ソレルは、現代の教育が恭しく吾我の禮讃にまで推舉したところの、一切の偶像を破壊するところに、一切の風船球を踏潰すことに、一種の殘忍な喜悅を感じてゐる。たつた三つだけ例證を舉

の舊教徒、人權同盟の會員或は倫理教化運動の連中、ヂュルクエム——尤も此の人は一九一七年に死んだ——の周圍を取捲く社會學者、更に實證論者、法科大學の諸教授、終りに一切の「國粹黨の有識官吏」に關しては、ジョオレスの

如き大學派の政治家は云ふまでもなく、ソレルは彼等を目して非常に低能な、また非常に下劣な人物であると思つてゐる。だから、若しソレルが自ら強い激情がない處に偉大なる歴史家はあり得ないと吾我に言はなかつたならば、誰だつて斯様な鋭鋒に茫然たらざるものはあるまい。

此の點から見れば、ソレルは疑もなく立派な史家であらう！此のソレルの論證は眞なる場合もあるが、併し亦た危險を伴ひ、實際餘りに無造作だと思はれる。洵にソレルの著作の論争の部分は、彼の死後まで生命を保つ程のものではない。で、彼の崇拜者が分りきつた不當な立論の

げて見れば、彼は Prière sur l'Acropole のうちに「出放題」を見るに過ぎない、さうしてマルクス・アウレリウスは、哲學的傳統に従へば、聖人の完全なる典型であるところの、彼の神聖なるマルクス・アウレリウスは、我が歴史家には、虛榮心の強い、意志の薄弱な、迷信の深い、それでゐて殘虐な憫むべき男、公衆の幸福の敵に外ならなかつたと映ずる。ルナンの云ふ聖人などは一人も存在せぬ、而してルナンその人すらも基督教を毫末も理解しない淫奔なるエビクロス學徒に過ぎなかつた。十八世紀の哲學者、即ち百科全書諸家は、就中ディドロオの如きは、淺薄にして胸を擡げたジャアナリストに過ぎない。此の謂ゆる啓蒙時代は、特に無茶苦茶の世紀であつたかの如く我が著者には見える。

若し夫れビュイソン・ブググレの如き大學の今を時めく教授、自由主義の新教徒、近代主義爲にさう屢ばいきりたつことを止めにしたなら、却つてもつと樂にそれを玩味することが出来るであらう。

此の大學とその嚴密なる組織の方法との憎惡のうちには、多分の誇張と虚偽とがある。一つの體系が内容に乏しい爲には、それが前後撞著なく調和してゐさへすれば、それで充分だ——かうソレルは考へてゐるらしい。「多くの例は著名なる哲學の貧弱さをその立派な、到れり盡せりの結構に依て證明してゐる。それは精神が新しい道に進むことを此等の哲學が妨げたためである」と。如何にも、——之に答へなければならぬ——此等の哲學は徒なる事であつたかも知れない、然しながらそれは此等の哲學が見事に建築されたからではない、それはかれらの出發點そのものが間違つてをり、又無意味のものであつたからである。その代りには、ソレルの

作物の到る處に閃いてゐる發明への氣遣ひを是認することは、さうして多分彼独自の研鑽に就ての著者の偽らざる反省に外ならないやうに見える次の言葉を噓し立てることは、出来ないことではない。「ある體系は、廣大なる缺陷を、重大なる矛盾を、或は甚大なる誤謬を包藏してゐる時でさへも、若し謂ゆる實在の中樞といつて差支へないものを把握する爲に執らなくてはならぬ有効なる戰術を多くの人人に暗示し得たならば、之を立派なものだと稱讚してもよいのである。……ある哲學は唯だ發明を助成する手段としてのみ價值がある」。それ故にソレルは、吾我は協調思想と國家綱紀との原則を弊履の如く棄てなくてはならぬといふことを、吾我をして確信せしめることには成功しなかつたにしても、それを公正に判斷するために従はなくてはならぬ定規をば吾我に教示してゐる。

る論說に於て、特に此種の類推を固執したが、此の論文にはマルクス、ブルウドン、ユイチエ及びソレルの學說が巧みに融合され、また一種の美を有つた抒情詩的な激越性を以て表現されてゐるのである。

然らば彼等「有識者」の共通の罪は何であるか？ それは彼等は皆寄生虫に過ぎないといふことである。彼等は唯だ思想や商品の交換を之れ事とする。彼等には精神に就てその外に現れた方面しか見えない、彼等に出來る藝は通俗化か教育事業か、若しくは精せい明智、精密、明瞭に定義され言語で説明された概念、數學及び純理科學位なものである。生産者は之に反して、聖賢でもあり、英雄でもあり、眞の藝術家でもあり、眞の哲學者でもあつて、靈魂の奥妙な部分に於ける創意と直觀とに依て、言語では嚴密に交通することが出來ない、従つて論辯的理性

ソレルが特に重要視したものは、發明、即ち觀念界に於ける生産であつて、彼は之を大學に於て見出すことが出來なかつたものだ。實際、此の立場から見ると、大學は眞面目に自己の過 *Hea culpa* を自認することが出來るであらうし、又此の峻嚴な批評は、他山の石として味ふべきものがあらう。若しソレルが「主知說」に對して抱いてゐる反感の基底を掘つて行くなれば、我が著者の口吻を學べば、大學の官僚哲學、恐らく此處にその誘因があるであらう。有ゆる大學の教員といふものは、ソレルに隨へば、一介の助教授であつても、又は堂々たる正教授であつても、彼が道樂者の懷疑論者にあらずんば、極々切つて唯心論者、理性論者、民主主義者の「有識者」である。而して彼は此の心理狀態をば辯護士、代議士及び商人と與にしてゐる。ソレルの高弟の一人であるエドワアル・ベルトは、あ

には理解することが出來ない一つの生命を生活してゐる。既に誰でも識らない者はないやうに、サンヂカリスムの哲學者はベルグソンの哲學を大いに利用したが、吾我は此の角度からしてベルグソン哲學を検討しなければならぬ。但だ「新學派」に依て教理として建てられた「有識者」の概括的不可能といふ命題は、サンヂカリスムを理解する上に、之を姑く忘れずにあつて欲しい。然しながら人は矢繼ばやに言ふだらう、此等のサンヂカリスムの哲學者は彼等自身が知識階級に屬するものではないかと。疑もなく、彼等の出生、彼等の教育及び多くは彼等の職業に依て、全くその通りである。けれども彼等は、彼等が此の名の烙印を捺した人人と混同されざらんことを本質的に要望する。……彼等は有識者といふ名前を「思想の一手販賣人」たらんことを冀ふ人人、換言すれば、プロレタリア自身は末

來永遠に、ルナンの言に従へば、獨力を以て彼等自身の哲學を樹立することが出来ない、従つて、決して彼等獨自のものであるところの世界を実現することが出来ずに、政治上の制度に随つて主人を變へざるを得ない、「創造の奴隸」より成る階級から一步も抜出ること出来ないだらうから、此の無産階級に代つて思考することを職業としようとする人人に適用するのである。

此の政治的定義の上に、新學派の論客は更にもつと哲學的な、他の定義を加へる。「有識者」とは、彼等に従ふと、理性論者、實證論者、「科學萬能」の迷信を懐く思想家といふのと同義である。知識人は自然と人間の完全なる認識に到達する爲に理性の全能をば信ずる。而して知識人は測り定めることの出来ない靈魂の無限にして神祕なる力をば理解しない。若しナシヨ

ナリズムとサンチカリズムとの間に存する對等關係を尙は主張することが必要であるならば、以上の數行はその一つの新しい確證を齎らすであらう。何となれば、——ギイ・グランの la Philosophie nationaliste を讀んだものには誰にも分る如く——ソレルが「デモクラアト」の知識人であるとして非難した、コントやルナンの弟子である此等の「思想の専門家」は、然もみな確實に嚴密に、民族主義者が望み通りの有識者であるからだ。

却説、此の政治狂的傾向に、また此の主知說の世界觀に、新學派の哲學者は二重に反對する。彼等は勞働社會にその獨自の價值とその階級意識とを啓示することを、それに考證を提與することを、それを指導する代りに戰闘用の彈藥をそれに供給することを、批判に依てその本能を溶かして仕舞ふどころか、それを失はないやう

にし、進んではそれを強めることを欲する。彼等は、更に逆襲して、「ブルジュアジイが非常な確信を以てその驚くべき結果を謳歌してゐる科學は、それを利用して生活してゐる人人が保證する程そんなに精確なものではない」といふことを論證することに依て、また理性論的獨斷主義が産み落した無量なる樂天觀の根本的な道徳否定を剔抉することに依て、「ブルジュア文明の權威を破壊しよう」とする。それ故に、そこには起り得べき理路の混亂が少しもない、で勞働運動の戰士たちは彼等の眞の友を認識するであらう。

斯く政治的執著の傾向を理性論の知識人に歸するといふ事は、多くの場合に多少の不當不正の譏を免れないにしても、今は此の點を指摘することを止めて、姑く此の明定を認めることとしよう。尤もソレルと雖も絶對にその點を否定

してゐる譯ではない。彼は「世の中には、彼等に大ぶ嫌なものだと感ぜられる事物を彼等の現實の眼で見ることが出来ない、従つて、少しでもデモクラシイに威嚴を添へることが出来るやうな理論を捏上げるとに頭を擡つてゐる或る眞面目な人人が何時もあるものだ」といふことを承認する。而して彼は例證としてベエ・ラコンブを擧げてゐる。しかしソレルに従へば、此の理論の創造者は、「努めて自己を欺かんとする」ものである。それは何も諄く云ふ必要はない。幾ら眞摯な男でも、知識人には生産を談ずるとは常に頗る困難の業であるといふ事實には一向變りがない、何故といふに、彼は彼自身が工業生産者でないからだ。若し此の有識者が教育家であるならば、此の困難は更に更にその大を加へるであらう、何故なら、此の場合には、彼は「教師の觀念」しか持合せてゐないであらうか

ら。
ソレル學說の精髓に宿つてゐる情操を完全に體するために、予は出来るだけ自己を没却してしかも私見を挟まない明識を以て、此の證言を書く。大學教授は大學教授の思想を持たねばならぬやうに、實業家は實業家の思想を持たなくてはならぬ。これは一箇の自明の理ではなくして、一箇の方法、ソレルがマルクスに借用したところの方法である、それは彼の哲學の中心に於ては唯物史觀である。サンヂカリスムの哲學者が、大學教育に依て全然違つた物の見方を窺けられた人人を、激昂させたのみならず、誘惑したのは此の方法に依てであるから、それに就て一言するのは必ずしも徒爾ではあるまい。勿論、茲に長く敷衍して論ずる程の問題ではないが、少くとも此の物の見方の色んな實を結んだ新機軸を瞥見する必要がある。

とはせぬ、暗涙に咽ぶ感傷的な唯心論に對する有力なる反動である。とは云へ、眞の唯心論者は、男性的な唯心論者は感違ひはしない。疑もなく觀念が世界を支配すると、彼等の中で最も偉大なる者ソレルの師の一人、ビエエル・ジョゼフ・ブルウドンは書いた。疑もなく觀念は革命に於て一つの役を演ずる。「併しながら此等の觀念は何を意味するか？何を反映するか？應へて曰く、利害關係と。」尙ほ又 *Idee générale de la révolution au XIX^e siècle* に於て「明かに、社會經濟が、世界を支配する。」と。彼の著作中に隱見する、多くの實例は此等の原文を裏書する、そしてブルウドンを以て唯物史觀の先驅者と爲すも敢て不當でないといふことを證明する、けれども此の意味に於てのみ彼は此の史觀の先驅者であるのではない、もつと複雑したもつと完全なる意味に於てもさうなのであ

先づ術語の内容を明かにして置かう。人は時として「唯物史觀」"Matérialisme historique"なる措辭を通俗な、ひどく下等な意味に用ひることがある。それは單に、人類は専ら利己的な利益の追求に依て支配されるものだといふ意味である。而して此等の利益の先頭に立つものは云ふまでもなく經濟上の利益であるから、一切の歴史は利益の、物質的利得の、また此の利得を實現する一手段である政權の追求に依て支配されるものとして現はれる。此のとき唯物史觀は利己主義、支配の爲め又は釋放の爲に、目前の經濟的技術に依て課せられたる形態に従つて戦ふ生産者の利己心といふのと同じ意味である。

唯も此の第一の意味が間違つてゐると斷言することは出来まい、といふはそれが實相と密接に契合してゐるからである。そは有ゆる場合に人間の本能及び欲望の苦い現實を嘗めて見よう

つて、今やその點を明示しなくてはならぬ。

大學に於ては、又さうでなくとも唯だ精神的な仕事にのみ携はつてゐる社會に於ては、觀念の萬能なる力を買被る習癖がある。彼等は信ずる、事物の面目を一新する爲には、唯だ觀念の體系を造り更へればよいのだと。これ即ち全く生粹の唯心論である。La Ruine du monde antique 及び *Système historique de Renan* の著者は、之と全く相反した方法を採用してゐるが、それはマルクスよりの借物であると共に、又マルクス以前、既にブルウドンのうちに見出されたものである。前後を顛倒しなくてはならぬ。觀念から出發してそれが人類史に及ぼす影響を研究する代りに、物質的環境から、もつと正確に言へば、一社會に於て使用された生産上の技術から立出して、如何に此の技術が法律的、道德的、宗教的觀念及び制度の形式に影響するかを攻究しなく

てはならぬ。マルクスはいふ、「人間の意識が彼の存在を決定するのではなく、逆に彼の社会的存在が(即ちマルクスに従へば、彼の生産者としての存在が)彼の意識を決定するのである。」

而してマルクス以前にブルウドンは曰く、「若し古代の宗教が、若し陳腐な哲學體系が、若し政治上の舊制度が、若し裁判上の慣例が、若し共同社會及び部分社會の古い形態が、更に又文學及び藝術の古い形態が諸の社會の物質的狀態の特殊な公式に過ぎなかつたとするならば此の狀態が將に變化せんとする時、換言すれば、生産の二大要素である労働と資本との間の關係の變化に依て經濟學が全然その面目を改める時、宗教も、哲學も、政治も、文學も、藝術も、感な悉く社會に於て變化するといふことは明白ではないか?」と。ソレル、並びにイタリヤのマルクス學徒、アントオニョ・ラブリョオラ及び特に

ベネデットオ・クロオチエとアルトッロ・ラブリョオラの兩氏は、此の哲學的歴史觀を固く奉じてゐる。

併しながら頭の悪い解釋は之を避けねばならぬ。唯物史觀はマルクスの思想からその生命を奪つたところの、大學教授や正統マルクス派の小生意氣な老耄どもが考へてゐるやうなものではない。經濟がイデオロジイを生み出すものだと言つてはならぬ。ミエドワアル・ベルトは吾我に説明する、何となれば其處には「經濟が古代哲學に於ける概念又は理念のそれと同じやうな役を演ずるであらう處の、逆嚮した主知說の方法」しかないであらう。ソレルはラファエルがそれに據て神の觀念を説明した謂ゆる唯物論の結構を大いに嘲笑してゐる。そして彼は觀念の或は傳統の或る人心に及ぼす影響を否定するどころか、或る場合には、唯心論者そのものに

對して唯心論を擁護することも往々ある程である。

かくの如くにして、彼は西曆の初期に東洋に於て行はれた猶太人の虐殺をば、ルナンの如く社會的若しくは經濟的原因に歸するのでなく、異教徒が救世主の思想に就、またその思想が弘布した虐殺に就て持つてゐた知識に依て説明する。異教徒は不意に攻撃されるのを懼れて先手を打つて攻勢に出たのである。均しくソレルは、聖書が神秘的な性情に及ぼした影響に就て、また一般に總ての聖書が革命的な氣風に與へた影響に就て、大いに吾我の注意を喚起するに努めた。彼は此の偉人の行動の上に安住する、純粹に心理學的な歴史觀は、結局、原因を輕小視し結果を重大視することに依て、歴史を不可解のものにするものだといふことを論證すべく努力したとはいへ、必ずしも發明家の影響や偉人

の感化を無視したわけではない。詰り、彼の考では、社會思想は「吾我の精神の不可避な法則」に由來するもので、此の法則は、「社會思想に殆んど恒久不變と云つてもいい。一定の發展の律動を與へる」ので吾我はそれに隨つて社會思想を塗變へて行くものであると云ふのである。

要するに、ソレルは經濟の思惟に及ぼす影響が絶対であるとは信じてゐない。彼は人間の活動は意識の違つた二平面に於て發動することが可能であると認める。その二方面とは「それが物質上の有ゆる障害を排除して、その幻想の創造を以て實在を塗換へるところの自由なる自然發生として現れる」時か、然らずんば「それが慣習の法則に依て規定された諸關係の下に、他の人間活動との交渉の中に引込まれる」時かである。換言すれば、若し予にして著者の思想を誤り傳へないならば、人間の活動は純粹なる審

美的創造に於てか若しくは純粹なる感傷的關係に於て起るものである。

併し正確に言へば、此等の精神活動の形態が純粹な状態で現はれるのは稀である。吾我は知らず識らず世界と接觸する第二の様式に影響を受けることが多いが、それは經濟である。

而してそれは當然だと、グイコ、マルクス、及びベルグソンに亞いでソレルは繰返して云ふ、それは又なせかど云ふに、吾我は吾我が作爲するもの、言換へると、吾我が製作するものだけを能く認識するからだ。また若し吾我がよく氣を附けて其處を監視しないならば、吾我の實踐活動の方式が吾我の一切の思想を色著けてゐるからだ。其處に唯物史觀の核心がある。談話の前に所作がある、もつと正確に言へば、制度を、並びにその仲立で、イデオロジイを説明する爲には、技術が最も重要なものとなつて來るので

い。ある唯心論者は、マルクス説が蕪雜であり不道德であるといふ點から之を非難せず、その上また彼等が考へる以上に彼等は非常に彼等の論敵と一致してゐたことを毫も怪しまずに、全く無知に基いて、マルクス説の缺陷を批評したのであつた。何故なら、彼等の批難は新マルクス學徒のそれでないところの、或る他のマルクス説に對してのみ放たれたからである。總て眞摯な思想家は一つのデリケートな哲學しか認めることは出來ない。此の哲學は、それが意識的に若しくは無意識的に動力及び動機の純粹に機械的な曲藝を高尙な美辭の下に匿してゐる、紛ひ物の皮相な唯心論に當面してゐないといふことがよく確かめられた後でなくては、唯心論を信じようとはしないものであるが、さうかと言つて靈魂の深い生活に於ける此の唯心論の可能を疑ふものではない。エドワアル・セルトの

ある。此のイデオロジイなるものは、多くの場合に、新しい技術を利用するといふ唯それだけの必要から生じた制度の産物である。此の實際的活動の影響する所は頗る廣大であつて、吾我が經濟に倣つた評價の方法を萬事に適用する實に敷へ切れぬほど澤山の場合がある位である。だが創造人はそれを是認することを欲しない、しかも世人は、經濟學者が人間を利得心の機械にしてしまふかの觀がある時に、彼等を罵詈を以て葬ることを決して忘れない。此の超人の憤怒はかういふ唯一つの事の證據である(茲にソレルの心氣は昂ぶる)、そは俗人輩が彼等の理論の奧義を論議するのは彼等には不快である、といふことである。

人は、猶ほ今日デアホンの假説に蹂躪されてゐるのを自覺しない如く、經濟のことを話すと何故怒り出すのか、その理由をよく掴んでゐない。此の譬喩は嚙緊めれば嚙緊めるといふ味が出てくるとはでないか。「浪漫派の矯飾を攻撃する時でも誰も愛の實在を疑はないやうに、道德家の偽善を宣告はしても、マルクス學徒は何ら道德そのものを危くするものでないといふことを信ずるの名譽をば、世人は彼等マルクス學徒に呈してもいいであらう。」

故に必要なのは理解し合ふことである。要するに、經濟上の唯物論とは一層純化された、一層敏感な、一層理想主義化された、一箇の唯心論に外ならないのである。伊太利に於けるソレル門下の筆頭、アルツウロ・ラブリョオラは、このところを適切な言葉でいひ表してゐる。如何なる學説でも唯物史觀の學説ほど唯心論の力に多大の重要を置いてゐるものはない。何となれば、慥かに、此の學説は歴史を永遠の流動及び轉成として、換言すれば、人間がそこに生活

するところの社會的境遇から絶えず脱れ出ようとする、人間の、譬へ背馳することはあつても、意識的努力の豫想することの出来ない結果として観るからである。」されば、唯物史觀とはベルグソンの學說に依てその缺陷を補はれたマルクスの說の一適用であると云ふことが出来る。

ソレルが經濟概念を純粹に觀念學的な被覆の下に見出してゐる場合は無數にあつて枚擧に違がない。唯そのうちから一つ二つを擧げて見ようか。例へば、「宗教は屢ば人間と神との關係を差引勘定の形の下に表すものである。多くの舊教徒は彼等が信用借をする場合、特別に超自然的な高値を要求することができ、しかも神の恵に依て、彼等にそれをある友達の會計に繰越して置くことが許されてゐるとさへ考へてゐる。」福音書は「乞食の爲の」書物であつて、「生産者の爲の」書籍でない。今まで何人もルソオの

Contrat social を理解しなかつた、といふ譯は、それが獨立した小工匠の共和國に相談に出掛けたいのを見たものがないからだ。若し希臘人が幾何學的精神に富んでゐたとするなら、それは彼等が特に固形體(金屬、木材或は石材)に加工してゐたからである。然るに、初步の化學的諸藝に秀でてゐた東洋人の方は、理路の當然として魔術に通ずるやうになつたのである。「幾何と共に固定性が勝つが如く、魔術と共に流動性が勝つのである。」テエヌが理解なくしてそれを明言したやうに、古代の彫像術が貞操觀念には富んでゐながら思想の深さに於て缺けるところが有るならば、「それは吾我がそこに建築師としての一家の眼を備へてゐるからである。」プラトオンの Timee に現れた彼の不可解な思想は、「明かに磁耶エタールの截工から」出たものであることに思ひ及べば甫めて解けるのである。アリストテレエ

スの第一動力説はアリストテレエスが力學に於ける運動の連鎖に就て反省した結果に由來する。一般に、古代の工業が人心を目的主義の哲學の方へ嚮導した如く、近代の工業は人心を機械主義の哲學の方へと連れて行く、と。等等。

吾我は固より以上の概觀が幾多の傾聽すべき創見に富んでゐることを認めるものであつて、茲にそれらに對し細評を加へようとは思はぬが、此の總てが均しく首肯するに足るものなどは思はないのである。吾我はテエヌに向けた批難と同じやうな苦言をソレルにも呈することが出来る。アンドレルが考へる如く、技術は必ずしも思想の上に著しい影響を及ぼすものではないかも知れない。また等しく、沙漠の一神教やラフォンテエヌの天才を嚴密にゴオル人の氣風とシヤンバアエヌの風景から演繹することは出来ないかも知れず、更に又た均しく、使徒の宗

教を彼等の漁夫といふ職業からして推及することは出来ないかも知れない。物理上の若しくは生理上の決定論に適合するやうに、經濟上の決定論にも當嵌つて、自由の錯覺を生せしめることの、事實の偶然といふものが、思ひ儲けのない、恐らく豫想も出来ない一つの方面があるものである。

然しながら、無論そこには、科學が利用しななくてはならない新しい指標があるのである。猶太の農民が、彼等の土地に執着の餘り、渠の教訓に背いて逡巡してゐた際に、使徒が渠基督に隨行したのは、彼等が漁夫、即ち遊放の民であつたからに外ならぬ。舊教の批評家たちはその點を認めるに吝なるものではない。若し夫れソレルの發見に至つては、縦しその全部が動かすべからざる眞理ではないにしても、大部分は非凡なる巧智の織成すところであつて、何人とし

て此の人の意表に出る物の見方に喫驚され魅惑されぬものはない。さうして、縦しや一から十まで賛意を表する譯には行かないにしても、常に精神の勞苦の最も純粹なる報酬であるところの此の精神上の恍惚を感じるに相違ない。

それ故に此の思想の向ふところは決定的である。それは史實の説明、觀念の起原、更に又團體的欲望の成立の上に全く新しき視野を開くものである。テエヌ並びにルナン以後、吾我は唯一の物理的、生理的又は心理的決定論のみを、自然の、種族の若しくは觀念の影響のみを考察することになつてゐた。此の學說の凝結である民族主義の歸結は、人間の全運命は彼等の郷土と彼等の死者との忠實なる反響に外ならないといふことである。茲に於てか、此の相對主義は一段と色彩を鮮明にして來るのであつて、則ち民族の愛の傍に、此の前者に屢ば相反する他の愛、

即ち階級の愛が來て並ぶのである。茲に於てか、民族主義の基礎である。同一の國土の上への、また同一の歴史の廻への、一つの國家の全人の集中に對して、民族の國境と感情とを超越して彼等が同じく勞働するが故に、技術が彼等を同じ規律に服せしめて、彼等の衷に同じ希望を懷かせるが故に同じ風に思考するところの總ての人人の縦の撒布が叛旗を翻すのである。

此の學說は絶對に新しいものでもなく、又ツンデカリスムに特有のものでもない。ポオル・ビュロオ及びルプレイの學派は、既に經濟上の決定論に就て漠然たる意味にでなく、工業上の用具といふ明確な意味に解された環境に就て、注意を喚起した、此の環境は新しい形勢を創造し、従つて社會的關係と傳統的感情との性質を改變するものなのである。ツレルはマルクス及びブルウダンの遺録を承けて、此種の考察に没

頭し、さうしてそれからルプレイが豫想しなかつたところの結論を引いてゐる。彼は有ゆるイデオロジイのうち此のイデオロジイの發明者が實際に用ひた、若しくは實際に用ひるのを見た技術の影響を探求してゐる。而して彼は公平なる同情、裕な美的創造、及び捕捉の出來ない直觀のうちのみ純粹なる靈性を發見する。かくして彼は今日の經濟的條件に於て一つの新しき道德の可能を發見する。科學的心理學は愈よき迷宮に入り、さうして新しき理想が人間の努力に手を差出してゐるのである。

然るに、若し社會哲學に於て何を措いても生産者を考慮しなければならぬとするなら、社會主義は特別に、これを建設する哲學者やそれを利用する政治家の想像としてよりも、彼等生産者自身の欲求と夢想との表現として現れるであらう。前者は彼等が研究すべく、又代表すべく

出精するところの階級の欲望をば眞に認識してゐない。彼等はその階級の一部を成してゐない。彼等は彼等自身の活動や彼等の屬する階級の諸の習慣から生れて來る、丸で違つた影響を脱却することが出來ない。此等の慣習は彼等と彼等の公平に觀察しようとする欲求との間に一枚の屏風として介在するのである。後者は、之と反對に、首丈まで勞働生活の中に沈淪してゐる。彼等は自らの名に於て語るの資格を有つてゐる、彼等は彼等自身の要求を悉く表明することが出來る。

茲に知識萬能の若しくは議會中心の社會主義、寄木細工の或は利己中心の社會主義と袂を別つて、勞働階級そのものの自發的な行爲並びに運動に絶大なる注意を拂はなくてはならぬ理由がある。斯様に解された社會主義は「生産者の哲學」に外ならない、即ち「腕の哲學」であつ

て、頭の哲學ではないのである。今日吾我は、此の「腕の哲學」の最も完全なる表現を革命的サンズカリスムのうちに發見する。吾我が此の運動に與へ得る「サンズカリスムの哲學」といふ呼稱は、多分の曖昧な意味を含んでゐる。簡短な社會主義といふ言葉より非常に明瞭な此の呼稱は、そこから出たのである。一方では、主知説との對當に於けるベルグソン哲學の研究、一方では、デモクラシイの社會主義との對當に於けるサンズカリスムの社會主義の研究、要するに其處にソレル學説の獨創性を理解するために明かにしなくてはならない二つの點がある。此の二方面の研究は、吾我をして吾我が現代の最も深いと同時に最も狂はしい精神の一つに直面してゐるといふ考を固く抱かしめるであらう。

生産的及び不生産的なる語に就て(四)

榎 本 鑛 治

十九

前號に叙述せる所は、アダム・スミスの生産的及び不生産的勞働説、之に對する佛國スミス派經濟學者の難點、其の難點に對する解説、及びスミス説に對する一二英國經濟論客の批評の大要であるが、之と同時に吾々は更に、所謂英國正統派經濟學に屬する有力者のスミス説に對する態度を知る必要がある。

先づジェイムス・ミル (James Mill) の著書を参照するに、かの農業のみ生産的なりと主張せるよりして純然たる「*プロダクティブ*」と稱せら

る「*ウィリアム・スペンサー* (William Spence) の見解に反對して、彼が一八〇八年に公表せる

居る (J. Mill, Elements of Political Economy, 1821, p. 182.)

「商業擁護論 (Commerce Defended: An Answer to the Arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and others have attempted to prove that Commerce is not a Source of National Wealth, 1808)」、及び次で彼が一八二一年に公刊せる「經濟學要論」(Elements of Political Economy) の何れに於てもジェイムス・ミルは生産的勞働及び不生産勞働に言及しなかつたのである。去ればミルは明かにアダム・スミスの生産的勞働説を是認せるものである。現に前者の一節に曰く「遊樂用の犬馬、及び一般奴婢は何物をも生産せず」也。(Commerce Defended, p. 69)

其の他ジェイムス・ミルは、其の「經濟學要論」中にも公然と、スミス以來唱へらるゝ生産的及び不生産的勞働説を是認せる言辭を示して

ずるは正に用語上の矛盾なりと、考へたるアダム・スミスは正當である。然らばスミス以後ジェ